

# 「網走まで」草稿から初出稿への変容-共感からの離脱-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 絵美利 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/6961">http://hdl.handle.net/10291/6961</a>

# 「網走まで」草稿から初出稿への変容

——共感からの離脱——

A study of SHIGA Naoya's Abashiri made:

The meaning of Alteration of Ending from  
the Draft Version to First-Publishing Version

博士後期課程 日本文学専攻 二〇〇二年度入学

田 中 絵美利

TANAKA Emiri

## 【論文要旨】

志賀直哉の「網走まで」は、完成稿に到るまで二度の改稿を経ている。小論においては、草稿と初出稿との比較を通して草稿の特色を示し、〈白樺派〉が出発するにあたって獲得したもの、喪失したものを明らかにしていく。

「網走まで」草稿は、特に「自分」が自らも網走に行く可能性を提示している点で初出稿と大きく異なる。「自分」が想像／創造する「女の人」の物語の結着点が大きく異なっているのだ。それ故、二つの物語を

結着点の相違から読み解いていく必要がある。なぜ草稿において「自分」は自らも網走に行く可能性を想起するのか、そしてその可能性が消失した初出稿において物語の様相はどう変化しているのか。物語の結着点の相違を出発点として、その他の言説の異同を読み解き、二つの物語を比較することを目指す。

【キーワード】 ①草稿分析 ②草稿から初出稿への改稿 ③〈白樺派〉

の出発 ④絶対的自我的創出 ⑤社会性の喪失

## 一 先行研究の整理

周知の通り、「網走まで」は現行テキストに到るまで、二度の大きな改稿を経ている。「明治四十一年八月十四日」と執筆年月日が明記された「小説 網走まで」(以下「草稿」とする)、明治四十三年四月、『白樺』創刊号に掲載された「網走まで」(以下「初出稿」とする)、大正七年三月に刊行された作品集『白樺の森』に収録時に加筆訂正された「網走まで」(以下「完成稿」とする)の三つが、現在確認されている「網走まで」テキストである。

完成稿に到るまでのテキストの変容については、既に先行研究で言及されている。これまでの研究の累積の中で、変容の概要を的確に抑えている紅野敏郎の解説を改めて引用しよう。

乗りあわせた「女の人」への関心、親しみ、同情は、草稿のほうが、

はるかに強く、あらわに主観を押し出して書きこまれている。それ  
 をかなり押えたかたちが『白樺』初出のものであり、さらに簡潔  
 にすっきりと仕たてあげ、余韻を持たせてあるのが現行の「網走ま  
 で」であることが、この三種の「網走まで」を読むことで明白にな  
 る。<sup>(1)</sup>

これまでの「網走まで」研究は、この紅野論に準ずる形で展開してい  
 ると言えよう。そしてまた、草稿から完成稿への変容を進化と捉え、草  
 稿の未熟さを指摘してきたことも、先行研究に見られる特色の一つであ  
 る。町田栄は「渡道移民について暴露する、呑気な無恥。「女の人」へ  
 の偏重。いわれない差別感情は鼻もちならぬとも、噴飯ものとも言えよ  
 う」と草稿を痛罵した。<sup>(2)</sup> 富澤成實もまた、草稿の語り手である「自分」  
 は「ナルシズムに酔った人物となっているために、感情におぼれた主  
 観的で詠嘆的な表現になっている」と指摘している。<sup>(3)</sup>

草稿を「ごく小規模な字句推敲の程度」で清書したものが『帝国文学』  
 で不採用になったテキストであると考え、<sup>(4)</sup> 確かに草稿は作品として  
 は未熟であったと言えるだろう。しかし、草稿から完成稿への異同が大  
 きければ大きいほど、完成稿では削除されてしまった可能性が草稿では  
 提起されていたと見ることもできるのだ。

小論においては、草稿と初出稿との言説の異同を改めて確認し、二つ  
 のテキストの間に見られる変容を明らかにしていく。この二つのテキス  
 トを取り上げるのは、その変容を通して後に「白樺派」として文学史に  
 位置付けられる潮流の出発点を明らかにできると考えるからである。ま

た、初出稿から完成稿への異同をここで問題としないのは、草稿から初  
 出稿という大きな改稿によってもたらされたテキストの変容は、そのま  
 ま完成稿に引き継がれていると考えるからである。すなわち、草稿から  
 初出稿へというドラスティックな変化に比して、初出稿から完成稿への  
 変化は小さく、初出稿と完成稿のテキストの大枠はほぼ同一であると言  
 えるのだ。

「網走まで」テキストは草稿から初出稿へと変化した際に、何を捨て  
 そして何を獲得したのか。草稿のはらんでいた可能性に特に注目しつつ  
 考えていきたい。

## 二 草稿と初出稿との比較を通して

まず最初に草稿と初出稿との異同を確認したい。読点の位置、文節の  
 移動、主語の省略など微細な異同に関しては、今回は記さない。また初  
 出稿から完成稿への異同は一切考慮しない。

草稿	初出稿
①【田舎者の夫婦に関する記述】	削除
② 母は本統に悲しさうな顔をした。	母は悲しさうな顔を した。
③ 悪く頭の鉢の開いた、顔色のよくない変な子	顔色の悪い、悪く頭 の鉢の開いた、妙な子
④ 「お病氣ぢや仕方ありません。それにしても女の方 とお子さんばかりの旅ぢや、御心配でせう」女の方は 只うなづいた。「これから先の長い事で、途中で病氣 でもされたらと、それが、貴方、心配でいます」と 母の人はしめやかにいつた。	削除

<p>⑤ 而して、泣きながら、今の夫の処へ来たのではないだらうか、なども考へられた。</p>	<p>⑥ 自分の後方では、田舎者の夫婦が何か声高に話しては笑つてゐた。自分の故郷でも近頃北海道へ移住するものが多いと聞いた。彼等は不自由になれた人々である。寂しい田舎から同じ寂しい田舎へと移つて行く人々である。然し此女の人のはその所に変な差がある。多分東京に生ひ立つた人であらう、少なくとも高等女学校程度の教育を受けた人であらう。友達には今、豊かな平和な生活に入つてゐる人もあらう。自分にはそれを聞く勇氣がなかつたけれども、北見の網走などいふ場所では仕舞ひの事なら、どうせチマチな事業ではない。恐らく熊などのある所であらう。雪なだれなどもある所であらう。こんな所まで、呼ばれていく女の心はどうであらう。北海道の処女林を讚美する人があつた女が、去りたくない都会の生活が出来なくなつて、処女林などのある寂しい所へ住まねばならぬとなつたらどうだらう。文学的道楽心では迎もあつたあたりの一冬にも堪えられまいと思ふ。</p>	<p>⑦</p>	<p>⑧ 途で御入れになつていただきます</p>	<p>⑩ 「どうも恐れ入ります」</p>
<p>更に其後の苦勞をさえ考へる事が出来る。</p>	<p>削除</p>	<p>女の人は、男の子を抱くやうにして、あたりを見廻はしたが別に考へもない。</p>	<p>削除 力を入れたので耳の根が、ポーと紅くなる</p>	<p>自分が黙つて肩から手をひいた時に女の方は「恐れ入ります」と繰返した</p>

<p>① 「端書は二枚だけですネ」と(抹消)それを受けとりながらいふ。「色々ありがたうございます」といつて女の人はお辭儀をした。</p>	<p>② 自分が北海道の網走を訪はぬかぎり恐らく終生再び会ふ事はあるまい。而してあの子の父のゐる間自分は此女の人を訪う事はないと思ふ。</p>	<p>③ 自分はあの女の人の悲しみにモット同情がしたいのだ。</p>	<p>④ 口でこそ聞かないが、それをあの女の人から許されてゐる者である。とかう思つた。</p>	<p>⑤ 然し何だか心にとがめる。自分は少時迷つた。</p>	<p>⑥ よかつたといふやうな氣もした</p>
<p>削除</p>	<p>削除</p>	<p>削除</p>	<p>削除</p>	<p>見やうか。見まいか。一寸、こんな風に迷つた</p>	<p>削除</p>

以降小論中の丸数字はこの表のナンバリングに対応する。

既に指摘されていることではあるが、草稿から初出稿への最も大きな異同は、「田舎者の夫婦」に関する記述がすべて削除されている点に求められる。また、前節で引用した紅野敏郎の解説は、初出稿において特に⑤⑥⑬⑭の言説が削除されたことに基づくと言えらる。草稿においては、「自分」は「女の人」の来歴、行く末をより具体的な形で想像している。また、「あの女の人の悲しみにモット同情がしたい」、「あの女の人から許されてゐる者」といった表現には、「女の人」に対する「自分」の感情がより露わに表れていると言えらる。しかし、ここでは⑫が削除されている点に特に注目したい。「自分」はここで自らが網走を訪れる可能性をいったん想起した上でそれを打ち消している。しかし、その打ち消しは「あの子の父がゐる間」という条

件付きのものであり、網走訪問の可能性は残されたままとなっている。

つまり、自らが網走に行くことが絶対により得ないことであると明言することができていないのだ。初出稿では⑩が削除され、「自分」は自らが網走に行く可能性を提示することはない。これは、草稿と初出稿の大きな差異であると言わねばならない。草稿では、「自分」はほんの数時間電車に乗り合わせた「女の人」を、遙か遠く離れた未開の地・網走まで訪ねる可能性を否定しきることができないのだ。

もちろん、この先「自分」が網走を訪れる可能性は現実的には皆無に等しく、仮に物語が「自分」の網走訪問へと展開するのであれば、そこをメロドラマ的であり物語は茶番とも言える様相を呈することとなる。しかし、ここで問題とすべきは、発想の中身の吟味ではなく、発想したという行為それ自体である。ここで「自分」は、あまりにも非現実的な、メロドラマ的な発想へと飛躍しているのである。「網走まで」テキストはいずれも「自分」を語り手に据え、「自分」が目前の具体的な事象を材料に物語を想像／創造することによって成り立っている。「自分」が「女の人」を巡ってつくり出す物語の結着点が自らの網走行きの可能性の提示となっており、それが草稿のみに見られる特色であるのならば、「自分」がつくり出す物語の様相は草稿と初出稿では大きく異なると言わざるを得ない。物語の結着点が異なる以上、二つのテキストを物語の結末から遡及的に読み直し、比較することが求められることになるのだ。

次節以降、物語の結末の差異に留意しつつ、さらなる比較検討を進めていきたい。

### 三 共感と離脱——草稿分析を通して——

ここでは、草稿を独立したテキストとして分析していく。前節で触れたように、草稿を「自分」の網走行きの可能性という結着点を持った物語として捉え直し、そしてそこを起点としてその他の言説の分析を実践することで、草稿テキストの特異点を明らかにすることがここでのねらいである。

「田舎者の夫婦」の記述が「自分」と「女の人」との共感を生み出すために配置された装置であることは、既に先行論で言われている通りである。町田栄は以下のように述べている。

——冒頭部の移民一家の点描は、「女の人」を引き出す重要な契機であり、巧妙な布石であったことがわかる。「内容そのものに必然的に関係を持つ」導入部であったのだ。ならばこそ、描写力をふるった一節でもある。この「田舎者の夫婦」との対比にみちびかれて、「女とその子等」の長旅と移住を、憐憫と思慕とを仮構して来たのである。<sup>(5)</sup>

「田舎者の夫婦」が登場することにより、「田舎者の夫婦」と「女の人」とのコントラストが鮮やかに浮かび上がり、その結果「吾々」対「彼等」という構図が描定されることとなる。「田舎者の夫婦」という対立項を置くことにより、「自分」は「女の人」に対する共感、「同情」を必然のものとして感じるのである。「自分」が表す「女の人」に対する過度の共

感、あるいは連帯感は「田舎者の夫婦」の記述によって導かれ、意味を持つのだ。

では、「自分」が「女の人」に対して感じる「吾々」意識の根拠とは何だろうか。「吾々」と「彼等」とを隔てる要素とは何であろうか。

⑤⑥の記述を確認したい。草稿では、より具体的に「自分」が「女の人の来歴を想像／創造していることが分かるだろう。東京に生まれ育ち、比較的裕福な「華やかな」生活を送り、「高等女学校程度の教育」は受けたものの、望まない結婚を強いられ、「泣きながら、今の夫の処へ来た」。「友達には今、豊かな平和な生活に入つてゐる人」もあるだろうに、夫が事業か何かに失敗したせいで、「熊などのるる」網走に移住することを余儀なくされる<sup>(6)</sup>。このように、「自分」は「女の人の言動や「チリメンの単衣に御納戸鹽瀬の帯」からより大きな物語をつくり上げているのである。

特に⑥の記述から、「吾々」と「彼等」を区別するものが中等教育であることが分かるだろう。明治三二年の高等女学校令によって女子の中等教育機関が初めて法制化され、全国に高等女学校が設置されることとなった。良妻賢母の育成を目指す女子中等教育機関の理念は国民のニーズと合致し、高等女学校生徒数は上昇の途を辿ることになる。明治四三年には高等女学校在学者数は五六〇〇〇人を超え、旧制中学在学者数の半数に迫る勢いを見せる<sup>(7)</sup>。明治三〇年代半ば頃、女学生の増加は「墮落女学生」の社会問題化へと発展するが、それは社会が女学生の存在を無視できないような状況になっていたことを示すものでもある。

とは言え、娘を高等女学校へやることのできた家庭は、中流以上の階

層に位置する家庭に限られていたと言えるだろう。明治三七年の高等女学校の月謝は全国平均で一円程度<sup>(8)</sup>、下宿や寄宿をさせる場合はさらに下宿料や食費が余分に必要となる。深谷昌志は明治二〇年代初頭に、中学生が一人暮らすのに一ヶ月に必要な金額は三円五〇銭から四円程度だと算出しているが、物価の上昇から考えて明治四〇年代初頭にはその三〜四倍掛かったのではないだろうか。石川啄木は明治三九年に尋常小学校の代用教員となったが、その際の月給は一二円だった。仮に女学生が一ヶ月暮らすのに必要な金額が一二円だとすると、尋常小学校代用教員の家庭では到底賄えないことになる。アップパークラスの子女でなければ、高等女学校に通わせる余裕がないことは言うまでもない。「田舎者の夫婦」には全く縁のない話である。

「自分」の履歴、学歴は一切語られていない。しかし、「あの女の人から許されてゐる者」という表現から、「女の人」と同等、あるいはそれ以上の家柄に属し、学歴を有していると推測される。友人と日光に旅行するという経済的・時間的余裕からは、モラトリウムにあることもまた類推される。言うまでもなく、モラトリウムは経済的・時間的余裕のあるものだけに許される特権だ。恐らく「自分」もまた、かつての「女の人」と同様にアップパークラスに属する青年なのだろう。「自分」たちを中等教育を受け得る層として特権化し、そうではない「田舎者の夫婦」を「不自由になれた人々」と区別している。

町田栄が痛罵したように、このように導かれる「いふにいはいはれぬ親しさ」の根幹には、稚拙な階級意識があると云わざるを得ない。しかし、階級意識に基づく「親しさ」だけでは、「自分」の網走行きという物語

の結着点を読み解くのは難しい。なぜなら、〈網走〉は中等教育の専有を許されたアップパークラスとは本来無縁の土地であるはずだからだ。

草稿において「自分」は自らの網走行きという物語の広がりの可能性を提示したが、しかしその可能性は「自分」の端書を読まないという選択によって収斂させられることとなっている。「自分」が「女の人」を訪ねて網走へ行く、それは「自分」と「女の人」との関係の深化、あるいは新たな物語の始まりを予感させるが、「自分」は「女の人」の端書を読まないことで「女の人」との関係をそこで断ってしまう。「女の人」の物語に介入することを回避したと言うこともできよう。この「自分」の選択は、それまでの「女の人」への心理的接近、連帯感とはギャップがあり、違和感を覚えずにはいられない。「若し自分が青森までの乗客であつたならばあの女の人はず自分にも彼も打ち明けて話したに相違ない」、「自分」は「それをあの女の人から許されてゐる者である」という固い連帯感の確認とは裏腹に、「自分」は端書を読まない理由を「何んだか心にとがめる」と曖昧な表現でしか表していない。默契とも言うに相応しい「女の人」との連帯感から離脱するには、あまりに小さく、中途半端な言い訳ではないだろうか。

完成稿を論考の対象とした小林幸夫は、「自分」は「誤認の中で悲劇の女を見守り救いの手を差し伸べる優しいヒーローを演じている」と指摘している<sup>(19)</sup>。この指摘は草稿にもまた適用できるのだろうか。適用できるのならば、「自分」の網走訪問は「女の人」の救済といった動機付けをもって理解されることとなる。

まず、これまで見過ごされてきたことだが、「自分」が「女の人」・

「田舎者の夫婦」と同一の客車に乗車している点に注目したい。小林幸夫によれば、「自分」の乗車した客車は三等車である<sup>(20)</sup>。三等車は言うまでもなく最低ランクの客車である。鉄道は、そこに乗り合わせる人々の等級を可視化する装置であることを忘れてはならない。「自分」は「田舎者の夫婦」を差別的に捉え、「吾々」の優位性を誇示しているが、「自分」が「田舎者の夫婦」と同じコンパートメントに入られていることを思い出せば、その構図は消失せざるを得ない。「自分」は、コンパートメントによって「田舎者の夫婦」と同じ等級に仕切られているのだ。「田舎者の夫婦」は最初「自分」も青森まで行くものと思ひ込んでいた。「女の人」もまた、「自分」が宇都宮で下車することに明らかな驚きを見せていた。列車を途中下車することは決して珍しくもないのに（現に「自分」の向かいに座っていた二人の乗客は、浦和で下車している）、周囲の人間は「自分」を当然青森にまで行くものと見ていたのだ。

「自分」は優越的な視点に立つて三等車に乗り込む人々を眺めている。「田舎の男」（田舎者の夫婦）の夫の「真黒な額から脂汗を流して、セイ／＼いひながら自分の後について来る」様子を、余裕をもって眺め「可笑し」く感じている。しかし、その「自分」の感じている優越性は周囲には認識されず、「自分」は「不自由になれた」「田舎者の夫婦」、あるいは網走に落魄していく「女の人」と同等に見られている。「自分」の描き出す「吾々」対「彼等」という構図は、「自分」が三等車に乗っているという事実、周囲の「自分」に対するまなざしによって常に相対化されているのである。

「自分」は中等教育を受け得る階層にあることに優越感を覚えている

ようにも思えるが、明治四〇年代は学歴が相対化され、大衆化された時期でもあった。中等教育機関在学者数が急増し、官僚機構の近代化の終息は学士の就職難を生み出し、『学問のすゝめ』で語られた学問による立身出世という明治社会の精神的支柱の限界を露呈させることとなった。中等以上の教育を受けることが出世へとつながる理想が否定される時代が、到来したのだ。現に「女の人」は高等女学校を出ながら網走移住を余儀なくされている。良縁に恵まれ、良妻賢母としての職務を全うすることが女にとつての立身出世であるとするのなら、「女の人」は立身出世とは無縁であったと言ふべきである。「泣きながら」でなくては嫁げないような夫との縁談は、家柄人柄共に良縁であるとは言えず、夫の酒毒が遺伝した「氣六っかし」い息子に困らされ、ついには殺される可能性まで示されるに到っては、良妻賢母としての役目を果たしているとは言い難い。「女の人」は良妻賢母になることを求める高等女学校を卒業したのにも関わらず、良妻賢母からは脱落しているのである。「自分」の置かれている状況もまた、決して安定したものではない。「元めた学校」の同窓生である曲木は、いったんは「上州製麻株式会社」の社長してメディアに登場したものの、その後は全く消息が分からず、「度々の失敗、失意」に遭遇したと推測されている。「公卿華族」という恵まれた出自にありながら、曲木は成功することはなかった。「自分」の置かれている状況、「自分」の未来が安寧であるかどうかをどうして言い切るだろう。「自分」は自らの職業や地位を直接的には明らかにしない。それは、明らかにできないからではないか。あるいは、現在の職業や地位が自らの存在を証明するよりどころにはならないことを、「自分」は

知っていたのではないか。仮に、「自分」が夏目漱石の作品に登場するような〈高等遊民〉であったとしても、〈高等遊民〉は見方を変えれば社会に出ることを拒まれた、一人前になれない男であることを忘れてはならない。終わりの見えないモラトリアムは、逃避でしかない。

このように見てくると、仮に草稿においても「自分」が「ヒーロー」を演じているとするならば、その姿はあまりに滑稽なものとして見えてくることになる。「自分」には「ヒーロー」たる余裕は本来あり得ないのだ。だとすると、「自分」の網走行きは救済とは違う意味を持つことになる。それは、「自分」もまた網走に落魄していく可能性の想起である。「あの子の父のゐる間自分は此女の人を訪う事はない」という条件は、「自分」が「あの子の父」の座に納まる可能性を感じさせ、網走という僻地で夫婦生活は「田舎者の夫婦」の情景を思い起こさせる。「吾々」の連帯感は、ここに到って中等教育を受けたことに基づくものではなく、中等教育を受けながらもアップパークラスからは脱落したことに基づくものとして意味を与えられることになるのだ。

自らの網走行きを想起する「自分」は、目の前にある「女の人」の不幸を自らにも起こり得るものとして捉えている。町田の指摘したように、「自分」は「田舎者の夫婦」を差別的に描写し、「吾々」と「彼等」のコントラストを強調して描いている。それを「呑気な無恥」「嘔飯もの」と批判することは容易い。しかし、「自分」もまた「田舎者の夫婦」と同様の運命を辿る可能性を持ち、自身がそれを否定しきれない状況を考えて、「自分」は意図的に「吾々」と「彼等」の差異を強調し、「田舎者の夫婦」を遠ざけていたと見ることができよう。差異を強調するこ



とによって、「田舎者の夫婦」とは異なる未来を獲得することを求めているのだ。

「吾々」と「彼等」の差異を強調した「自分」は、さらには「吾々」内部の差異を創造する。「自分」は「女の人」の端書を読むことはせず、「女の人」との関係を通つことを選ぶ。それは、自らの落魄という物語の展開を断ち切る行為であると共に、「女の人」との共感関係・「吾々」意識から離脱する行為でもある。「モット同情がしたい」「いふにははれぬ親しさ」という、それまで築き上げてきた感情を断ち切り、その感情を裏切る行為を選ぶことによって、「自分」は自ら「女の人」との差異を創造する。「女の人」の端書を読まないことによって、網走に落魄していくものとそうでないものという、差異が二人に生まれるのだ。

「女の人」に選ばれし者の地位を自ら下りることで、「自分」は「よかつたといふやうな気」になる。それは、「心にとがめる」などという道徳心に基づくものではないだろう。「自分」とより近い家柄に生まれ、教育を受けた「女の人」の生身の物語にこれ以上接近することは、「自分」と「女の人」の関係をより密接にする可能性がある。「自分」はこれ以上「女の人」の物語に踏み込まないということを選ぶことにより、「女の人」とは違った未来に生きる自らの物語を想像／創造するのだ。「自分」がテキストの末尾で獲得する安心感には、単なる階級意識には回収され得ない、「自分」の「女の人」に対する「いふにははれぬ親しさ」がある。草稿の「自分」は、「ヒーロー」とは無縁の危うさの中に立っていると言うべきだろう。

#### 四 初出稿への変容

では、これまで見てきた物語は、テキストの改稿によってどのような変化するのだろうか。初出稿においても、「云ふにははれぬ親しさ」といった表現は登場する。しかし、その他の言説の異同によって「親しさ」の意味が大きく変容することは言うまでもない。

⑥の削除によって、「女の人」の網走行きは移住とは明記されず、「女持の信玄袋と布呂敷包が一つ」という持ち物から、あるいは数日間の旅行かも知れないとも思わせることとなっている。また、「田舎者の夫婦」が登場しないことにより、「吾々」対「彼等」という明確な構図は現れず、「自分」と「女の人」の階級意識に基づく連帯感も物語からは読みとれない。富澤成實は、「現行（引用者注：完成稿）の『網走まで』は、「同情」や「親しさ」という言葉の削除によって、「自分」と「女の人」の関わりが、そうした一義的な限定性から解放され、容易には分類できないような名状しがたいものとして、ひとまずは作品中のそれぞれの場面の中に放り出されることになる」と述べ、別稿では完成稿における「自分」と「女の人」との関係を「エロス」ということばで表している<sup>12</sup>。初出稿には「親しさ」ということばはまだ残されているが、「田舎者の夫婦」の登場しない物語世界において、「自分」の「女の人」に対して感じる「親しさ」は草稿とおなじ意味合いを持つことはなく、そう感じる必然性は「エロス」とでも表現しなければ理解できないような、不透明なものとしてテキストに表れている<sup>13</sup>。

草稿と初出稿の執筆時期は二年ほどしか離れておらず、社会状況は大

大きく変化していない。学士の腰弁化は一層進行し、帝国大学を出ても就職が決まらない人の数は上昇する一方だった。<sup>(14)</sup> 明治四五年に発表された夏目漱石の『彼岸過迄』の主人公・敬太郎は、東京帝国大学を卒業したものの就職が決まらず、職探しに奔走している。帝大卒というブランドが意味を成さなくなっているのだ。つまり、「自分」を取り巻く社会状況は変化していないか、むしろ悪化しているのと言うべきである。

しかし、「自分」の態度には大きな変化が見られる。「自分」は網走に落魄していく「女の人」を目の前にし、その「女の人」に「親しさ」は覚えるが、網走行きを自らのものとして捉えることはない。いや、それどころか初出稿においては、常に「女の人」から一步離れた「自分」の余裕が感じられ、「自分」が「女の人」に「云ふにはれぬ親しさ」を感じながらも「女の人」から一步引いていることが分かる。

「自分」は「女の人」の来歴を具体的に想像／創造しようとはしない。「自分」が具体的に想像／創造するのは、「女の人」の夫についてのみである。「女の人」については、「結婚以前や、其当時の華やかな事を思ふ浮べ」とはいるが、その「華やかな」映像は具体的に言語化されることはない。「自分」は「女の人」を「憐な女の人」と捉えているが、その「憐」を構成する要素を具体的には提示しない。「女の人」の置かれた現状を、大酒飲みの方の「度々の失敗」によって網走へと落魄していくと理解してはいるが、「女の人」の物語の大枠は提示しても、物語のヒロインであるはずの「女の人」の心情にまで踏み込むことはしない。「女の人」の網走での生活がどれほど苛酷なものなのか、思いやってみることもないのだ。そのため、初出稿において「女の人」の「憐」さ、網走

という土地の喚起するイメージはあまりにも抽象的なものとなってしまっている。初出稿からは、抽象的な不幸しか読み取ることはできない。

「自分」は「女の人」に対して「云ふにはれぬ親しさ」を感じているが、その「親しさ」は最初からコンパトメントの中にあるときにのみ感じられるものとして約束された、期限付きのものであったと言うことができるだろう。「自分」は自らが宇都宮で下車した後の「女の人」の行く末を思ってみることはない。「女の人」との関係は最初から限られた、「行きすり<sup>(15)</sup>」のものでしかないのだ。「自分」は「此母は、今の夫に、いちめられ尽くして死ぬか、若し生き残つたにしても此兒に何時か殺されずには居まい」と「女の人」の物語の結着点を定めるが、「女の人」のこれからの生を想像／創造することなく、ただ最期の時だけを想像／創造する「自分」の態度は、余りに残酷であると言わねばなるまい。

「自分」は「女の人」の生きる時間に関わることなく、死の瞬間だけを捉えている。「自分」の感じている「云ふにはれぬ親しさ」は「女の人」の生身の現実を置き去りにして極めて感傷的に獲得されたもので、列車のコンパトメントという限られた密室空間の中でのみ生きるものなのだ。「自分」は「憐な女の人」に「親しさ」は覚えるが、自らは網走行きとは無縁の高見に立って「女の人」を見下ろしている。「自分」の感じる「親しさ」には、落魄とは無縁の青年の余裕、あるいは稚拙な義侠心が感じられる。

先に述べたように、草稿と初出稿の執筆期間は大きく離れてはおらず、背後にある社会状況は好転してはいない。にも関わらず、「自分」の「女の人」に対する態度、「女の人」の物語を想像／創造する態度は

大きく変化している。草稿で「自分」が「女の人」に感じていた「親しさ」はコンパートメントからはみ出し、未来へと広がる可能性を秘めていたが、初出稿で「自分」の感じる「親しさ」は、最初から限られたものであった。しかし、この態度の変化は「自分」にとって不幸な未来を遠ざける対処策であったと見るべきであろう。草稿において、「自分」は「女の人」の不幸に同調し、共感することで、自らのつくり出した「女の人」の物語に引きずり込まれていった。「自分」の網走行きとは、「自分」が「女の人」とより密接に関わることであり、「自分」が「女の人」の物語に主要な登場人物として参加することである。つまり、草稿において物語の語り手である「自分」は、語られる対象である「女の人」に次第に共感、自己同一化し、いつの間にか「女の人」の物語へと入り込んでいく危うさを抱えているのだ。しかし、初出稿において「自分」は「女の人」と一定の距離を保ったまま語っている。語り手としては安定した立ち位置を保ちつつ、常に「女の人」を一段上から見下ろしている。「自分」はあくまでも「女の人」の物語の傍観者なのだ。

だからこそ、その傍観者の態度は、本来傍観者たり得ない状況だからこそ確立されたポーズであると見るべきだろう。草稿同様に「自分」を取り巻く社会状況は厳しい。「自分」は相変わらず自らの職業を名乗ることができていない。しかし、だからこそ、「自分」は「女の人」を遠ざけ、一段上から見下ろす立ち位置を確保するのだ。草稿においては、「自分」は端書を読まない行為を選択することによって、自らと「女の人」を区別した。初出稿では、「自分」は最初から自らを「女の人」とは区別し続けている。「女の人」の心情に踏み込むことを避け、「女の人」

を抽象的にしか捉えられない立場をとる「自分」は、「女の人」との密接な連帯意識を構築することはできない。「自分」が「女の人」に自己同一化するほどの「親しさ」を覚えることはないのだ。それは、いつ何時「女の人」とおなじ立場に立つか分からない「自分」が選んだ、自衛的態度であると見ることができよう。「自分」の余裕を保証する論拠はどこにもない。それにも関わらず、「自分」は余裕を仮装しているのだ。

初出稿を読んだ小宮豊隆は、「何んとなくゆつたり、ゆつたり、ゆつたり」と評した<sup>16</sup>。初出稿の持つこの「ゆつたり」さは、「自分」が「女の人」と一定の距離を保つことによって生まれる余裕に基づくものであろう。自然主義文学の強調した人間の救いようのない運命観から、初出稿は解放されている。父親の酒毒の遺伝というモチーフには自然主義的要素が感じられるが、初出稿では「自分」自身は遺伝や運命に対する恐怖とは無縁であり、自然主義の呪縛から逃れている。草稿は、列車で乗り合わせただけの「女の人」の不幸を自らのものとして受けとめ、不幸が連鎖する可能性を否定しきれない点で、自然主義的な視点に立っているとさええよう。草稿において、「自分」は自らが落魄する可能性を最期まで否定できない。しかし、初出稿においては、「自分」にとって「女の人」の不幸は彼岸のものである。彼岸のものとする根拠は示されないが、「自分」には「女の人」の不幸を傍観し続けることができている。草稿から初出稿への「自分」の語り手としての態度の変容は、自然主義的生観・人間観の超克であると言え、それこそ「白樺派」という新しい文学の始まりであったと言えよう。

しかし、「自分」は「女の人」の不幸な物語に対する態度を変える。こ

とによって自らの安定した立ち位置を確保はしたが、それと同時に失ったものもあつたことを忘れてはならない。それは、虐げられた者への同情であり、虐げられた者の位置から社会を見る視点である。〈白樺派〉の文学が社会性を欠いていることは繰り返し指摘されてきたが、志賀直哉に限って言えば「網走まで」の草稿から初出稿への改稿において、弱者の視点に立った社会の表出の可能性は捨てられることとなった。自然主義文学に飽いた読者には、〈白樺派〉の持つ余裕が新鮮に感じられたことだろう。しかし、その一方で文学はより大衆から乖離した高尚な趣味へと転じていく契機を持つこととなった。志賀直哉は自我の絶対性を信じ、「剃刀」「范の犯罪」といった作品を発表していく。しかし、志賀のいずれの作品においても、女の自我が顧みられたことはない。女という社会的弱者は文学から駆逐され、文学の男性化が進行していくのである。

以上のように、「網走まで」草稿から初出稿への改稿には、自然主義を超越する絶対的自我の萌芽を見ることができると言える。そういった点で、初出稿は『白樺』創刊号に相応しいテキストであるとも言えよう。しかし、絶対的自我の創出は、その自我の絶対性の根拠が示されない故に欺瞞であるとも言える。「網走まで」初出稿において、「自分」と「女の人」を区別する根拠は示されない。にも関わらず、優越的な立場から「女の人」を捉え、語る「自分」の獲得する余裕は、現実から目を逸らし、今現在虐げられている人々を切り捨てることによって生まれる、実に危ういものである。〈白樺派〉の文学の出発点において、このような欺瞞が確認できることを忘れることなく、〈白樺派〉文学を歓迎した文壇を捉

え直していくことが求められるだろう。

注

- (1) 紅野敏郎「後記」(『志賀直哉全集』第一巻)一九七三・五 岩波書店 六〇二頁
- (2) 町田栄「志賀直哉『網走まで』教材化の根幹——第一草稿から「白樺」初出稿への変容——」(『日本文学』二六巻七号)一九七七・七 日本文学協会 五二頁
- (3) 富澤成實「志賀直哉『網走まで』の転回——草稿および初出稿との比較を通して——」(『明治大学教養論集』三五七号)二〇〇二・三 明治大学教養論集刊行会 七〇頁
- (4) 町田前掲論文 四六〇―四七頁
- (5) 町田前掲論文 五三頁
- (6) 平岡敏夫は、草稿では⑥の記述によって「女の人」の「網走移住」が明らかにされているが、初出稿以降⑥が削除されたことにより、「網走」は網走移住とはきめられない象徴的な意味を持つことになった」と述べている。
- (7) 『網走まで』——〈網走〉のイメージ(『解釈と鑑賞』五二巻一号)一九八七・一 至文堂 七二頁
- (8) 『日本近代教育史事典』一九七一・一二 平凡社 八六〇―八七頁
- (9) 『教育公報』一九〇四・一二 帝国教育会 二〇頁
- (10) 深谷昌志『学歴主義の系譜』一九六九・六 黎明書房 一七四―一七五頁
- (11) 小林幸夫「『網走まで』論——へ生きられる時間への破綻と隠蔽——」(『作新学院女子短期大学紀要』九号)一九八五・一二 作新学院女子短期大学紀要委員会 四二頁
- (12) 小林前掲論文 四三頁
- (13) 富澤成實「志賀直哉『網走まで』の深層——「女の人」をめぐるエロスと葬送——」(『明治大学人文科学研究所紀要』五五冊)二〇〇四・三 明治

治大学人文科学研究所

- (14) 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』二〇〇五・三 世界  
思想社 一〇一～一〇二頁
- (15) 富澤成實『網走まで』のエロス』『日本文芸学』第二五号) 一九八八・  
一二 日本文芸学会 五一頁
- (16) 小宮豊隆『四月の小説』(『ホトトギス』一三卷九号) 一九一〇・五 ホ  
トトギス社 四四頁